

はじめに

公益社団法人日本教育会は、折々の社会状況に鑑みて調査研究委員会を設置し、調査・研究を行い、その成果を提言として公表してきた。

平成25年4月、理事会から「自らを律する心を育てる」ことについて諮問を受けた本委員会は2年にわたり調査・研究及び協議を重ねた。

私たちは、人としての尊厳と生きることへの欲求をもつ、かけがえのない独立した個人として存在するとともに、自らが所属する集団の一員として日々生活を営んでいる。

社会という枠組みの中で、個人の欲求と集団の要求との調和を図ることが求められる。調和を図る過程において、当然葛藤も生じようが各個人がお互いに相手の尊厳と人権に敬意を抱き尊重すること、節度を保ち思いやりのある心遣いをすることで、各個人が生き生きと円滑に暮らせる社会が成立するのではないだろうか。そのために、自らを律する心を保ち続けることが大切であると考えます。

平成23年3月11日の東日本大震災は我が国に未曾有の災害をもたらした。震災津波で被害を受け過酷な状況の下にあっても被災された人々は避難所などで辛抱強く耐え忍び、互いを気遣い譲り合い整然と行動していた。被災地の同胞の気高い姿に、私たちは感動と感銘を覚えた。日本国民のみならず世界各国の人々も被災された方々に思いを寄せ、慰め励ましたいと支援に立ち上がり、果敢に行動してくれた。

一方、現在の我が国では、自らを律することを忘れた大人たちのモラルの低下が進み、身勝手とも言える行動の数々が子どもにも悪影響を及ぼし、筆舌に尽くしがたい苦しみを強めている事例もある。

平成12年に「児童虐待の防止等に関する法律」が公布されたが、厚生労働省によれば、平成25年度の全国の児童相談所に寄せられた児童虐待相談件数は73,765件と年々増加している。平成15年7月から同24年3月までの間に、虐待を受けて尊い命を絶たれた子どもは495人、心中の道連れにされた子どもは355人である。

また、深刻ないじめに苦しんでいる子どもも大勢いる。平成25年度に全国の小・中・高・特別支援学校で認知されたいじめの件数は185,860件にのぼると文部科学省は示している。

また、原因はさまざまであろうが、平成22年から24年までの3年間に自ら命を絶った子どもは976人、なかでも高校生が723人に及んでいる。この事実には肅然たる思いである。

平成25年度厚生労働省調査によれば、虐待や親の病気などで家族と一緒に暮らせない子どもたち約3万人が全国595の児童養護施設で生活をしている。施設で暮らす中学3年以上の子どもたちが「大切なこと」と思うもの上位三つは、「健康」「友達がたくさんいる」「夢を持っている」であった。この回答からこの子たちの将来に一筋の光を見出したいと思う。また、日本の子どもたちの未来に希望を抱き、応援を続けていきたい。

私たちは、子どもたちが適切な環境のもとで心身ともに健やかに成長し、豊かな道徳性を身に付け、次の時代の形成者、将来のよき大人として自立してくれることを願っている。そのための支援を惜しんではならないと考える。そのために、まず大人自身が自らを律する心を持ち続けることが大切であることは、言うまでもない。

現在、我が国の幼児教育、初等・中等教育に関わる基本的理念として「生きる力」が掲げられている。これは、平成8年中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で提言されたもので、これからの変化の激しい時代にあって、いかに社会が変化しようとする必要能力として位置づけられ、「生きる力」の育成のために学校・家庭・地域・行政等が連携し、それぞれの役割を果たすことが求められている。

答申は、「生きる力」を構成するものとして「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」を二番目に挙げ、その重要性を認識している。

本委員会は、いま一度、自らを律することに思いを致し、その心を育むために何が必要か、どんな手立てが講じることが大切かを話し合ってきた。

阪神淡路大震災が発生した平成7(1995)年は、後にボランティア元年といわれるように、人々に他を思いやる心を芽生えさせるとともに、自らを活かす「新しい公共の精神」を根付かせた。私たちの内にも自らを律する心をもって社会に貢献したいと願い、行動する先人のDNAが脈々と流れているのではないだろうか。

自らを律する心は、社会生活を営むなかでさまざまな人々や事物、環境との関わりを通して磨かれ光を放っていく。人は各成長段階において、ふさわしい生活や活動を十分に経験することで視野を広げ、認識力を高め、自己探求を行い、自己実現を果たしていく。望ましく継続性のある成長が遂げられるよう、ときどきの課題を踏まえ適切な対応と支援を講じていくことが求められる。

近年、未曾有の災害が続いている日本であるが、日本人は、非常時のみならず平時においても、自らを律して行動する「よさ」を発揮できると私たちは信じている。いまこそ自らを律する心を育てることに思いを致し、次代の子どもたちに継承していく気運を高めたいと願っている。

この願いをもって、本資料を作成した。この提言の趣旨をご理解いただくとともにご批評を賜り、日々の教育活動において参考としていただければ望外の喜びである。